展示解説員のおしごと紹介

展示解説員　帆北　智美

展示解説員は、常設展示において来館者の要望やテーマに沿いながら展示資料を解説したり、質問に答えたりと様々な取組を行っています。

気軽にお声かけしていただける身近な存在であるよう、丁寧な対応を展示解説員一人一人が心がけ、日々業務に臨んでいます。

黎明館研修（企業向け）の様子

様々な目的で黎明館を訪れる来館者とお会いする中で、貴重なお話を伺う多くの機会に恵まれ、どんなことに興味を持ち、知りたいと望まれているのか、考えさせられる場面に遭遇します。ときには、展示解説員がそれに応えうる情報と知識を持ち合わせていないこともあるため、展示解説員の対応力向上を図る様々な研修を行っています。

また、学芸専門員と現地を訪ねて、史跡や実物資料に触れる現地研修を実施しています。実際に現地に赴くことで得られる、臨場感溢れた解説を目指し、平成9（1997）年からこれまで継続的に実施してきました。

また、令和2（2020）年3月には御楼門が完成し、常設展示資料と併せて御楼門での解説・案内も実施しています。この1年間だけでも多くの団体や個人の方に対し、解説・案内を行っており、黎明館での学びの幅が益々広がりをみせています。

夏休みには
「黎明館キッズフェスタ」を開催。
親子で学ぶことを目的に
毎年テーマを設定して、
鹿児島の魅力を発見できる
イベントを開催しています。

【今後の黎明館と展示解説員】

今後も多くの来館者と接する中で、知りたいことや疑問解決の糸口を来館者と一緒に見つけたり、学芸専門員と連携したり、求められるニーズに少しでも応えていけるよう、展示解説の在り方について模索し、鹿児島の歴史・文化を理解していただく一助となることを目指していきます。

昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大により、多くの子ども達の「学びの場」が奪われ、苦しい1年を過ごしてきたと思います。

私たちが望むことは、このような状況の中で、黎明館を歴史や文化、美術・工芸における「学びの拠点」として活用していただきたいということです。そして、自分で興味を持ち、調べ、考え、発見し、そこから広がる世界を、より多くの子どもたちに体現してほしいと考えています。

また、守り伝え、未来に残すための貴重な資料を大切に扱うことにもご理解いただきながら、歴史や文化を知ることに、喜びを感じる子どもたちを黎明館から増やしていけたらと願います。

時代によって求められる、地域の博物館としての役割も様々に変化していく中で、子どもたちを含めた来館者の「今日は楽しかった。また来たい。」という元気な声をたくさん聞くことができるように、展示解説員の取り組みを更に充実させていきたいと思います。

皆様のお越しを
お待ちしています

【ウィークリー・ミュージアムガイド】
○ 毎週日曜日11時から開催
○ 歴史・文化コース／御楼門コース
を各週交互に開催中

詳細は黎明館HP、SNSで
ご確認ください。

毎週日曜日は「ウィークリー・ミュージアムガイド」

歴史・文化コース／御楼門コースを各週交互に開催しており、お一人から何度でも参加することができます。
また、解説対応の形態も様々で、学校・企業・一般の団体から個人の方まで、利用したい・聞きたいタイミングで、展示解説員の案内を活用していただくこともできます。

学芸員 EYES!

学芸員イチオシの
収蔵資料を紹介します。

第4回
古代木簡資料（複製）と
南九州・奄美群島

8世紀前半の奄美は、なんて表記された？

時代を遡るほど、識字率は低く、古代においては、律令国家に関係する支配階層や寺社関係者が文献史料（文字で記録された史料）を残します。鹿児島県域では、古代の文献史料は殆ど残っていません。一方、近年の発掘調査では、文字が記された墨書土器や木簡等が出土し、断片的ながら、文字で示す具体的な情報がうかがえます。

黎明館常設展示1階「先史・古代のかごしま」の「薩摩・大隅のくに」では、大宰府政庁跡（太宰府市）周辺不丁地区に8世紀初頭～中葉（天平年間）に存在した溝から出土した木簡や、平城宮跡（奈良市）出土木簡の複製資料を展示しています。

薩摩国関係の木簡は、薩摩国や薩摩国内の郡が作成した付札で、大宰府へ送る貢納物をまとめた袋に取り付けられたと考えられます。大隅国関係の「来原郡」（桑原郡、現在の姶良市周辺）や大隅郡（不明、大隅半島中部か）、南島の「掩美嶋」（奄美大島か）の付札は規格が共通しており、大隅国か大宰府でまとめて作成されたと考えられます。

657年「海見島」（『日本書紀』）を初見とする奄美情報は、682年「阿麻彌人」（『日本書紀』）、699年「菴美」・714年「奄美」（『続日本紀』）と散見します。

大宰府政庁跡出土木簡は、8世紀前半に、大宰府－大隅国－「掩美嶋」が行政的に関係を持っていたことを示します。

今秋開催予定の黎明館企画特別展「ほこらしゃ奄美～海と山の織りなすシマの世界～」では、「掩美嶋」木簡（複製）も展示します。南九州－奄美群島－琉球の結びつきを様々な資料からご覧ください。

常設展示
先史・古代で
展示中

学芸課 企画資料係長
上村 俊洋（考古担当）

【参考文献】
○九州歴史資料館編2014「大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ－不丁地区 遺物編2－」
○黎明館編2020「鹿児島県歴史・美術センター黎明館 常設展示総合案内」P26
○永山修一2021「文字資料から見る古代・中世並行期の奄美・沖縄」（隼人文化研究会 第514回報告資料）

黎明館のフカボリ❷

錦手（にしきで）アマビエ像（苗代川系）

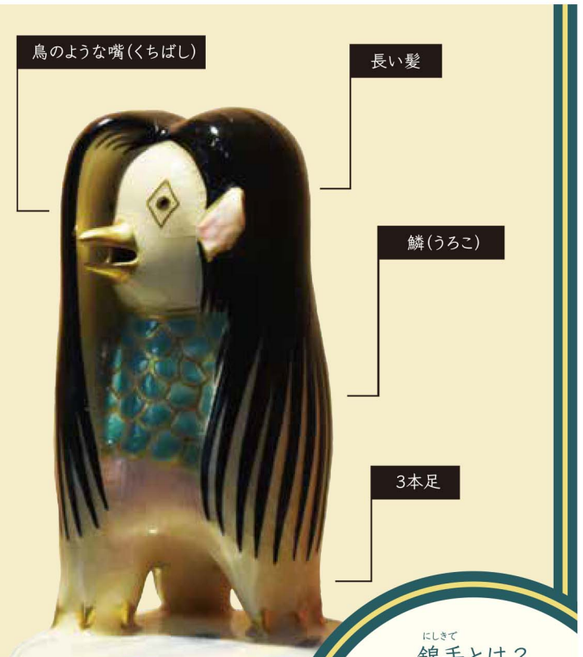
沈寿官窯

アマビエは、弘化3（1846）年5月に肥後国（熊本県）の海に現れ、豊作や疫病を予言し、その姿を描いて人々に見せると疫病退散の御利益があるという妖怪です。長い髪に鳥のような嘴（くちばし）、体は鱗（うろこ）に覆われた3本足の半人半魚の姿が特徴です。

このアマビエ像は、新型コロナウイルス禍の中、京都大学附属図書館が所蔵する瓦版をもとに型を起こし、薩摩焼の伝統製法でつくられました。白色の胎土に透明釉をかけて、およそ1280℃で焼成、手描きで上絵付けが施されています。

日本の歴史においては、くり返し疫病が発生し、人々に恐れられてきました。疫病にかからないようにという切なる願いの拠り所として、絵画や像など、様々なものが作られてきたのです。

黎明館1階ロビーに展示しています。



錦手（にしきで）とは？

金彩を使用せず、色絵の具のみで上絵付けをする技法を色絵といいます。色絵と金彩で仕上げたものが錦手と呼ばれます。